琉球大学学術リポジトリ

日越比較言語教育研究(1)ベトナム入門期「国語」教科書の考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2008-10-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 梶村, 光郎, 村上, 呂里, ⊠⊠ng Th⊠ Thu Hà, 那須, 泉, Kajimura, Mitsurou, Murakami, Rori, ⊠⊠ng Th⊠ Thu Hà, Nasu, Izumi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/7628

日越比較言語教育研究(1)

ベトナム入門期「国語」教科書の考察

梶村 光郎*　村上 呂里*　Đống Thị Thu Hà**　那須　泉***

A comparative study of linguisutic education between Japan and Vietnam

− about "national language" texts for first grader −

KAJIMURA Mitsurou　MURAKAMI Rori
Đồng Thị Thu Hà　NASU Izumi

はじめに

ベトナムの歴史をふりかえるとき、それは被侵略・被植民地化と抵抗の歴史であったといってよいだろう。紀元前２世紀から938年独立を勝ち取るまで千年以上に及ぶ中国支配を受け、また近代においては、フランスによって1862年南部三省を、1867年には南部全域を、1884年までには中・北部も植民地化され、現代においては1975年ベトナム戦争が終結するまで激しくアメリカによる侵略と戦わねばならなかった。ベトナムの言語文化は、そうした歴史の渦のなかで独自の発展を遂げてきた。すなわち前近代には中国文化の強い影響と葛藤のもとに「漢越語」を育み、近現代にはフランス語の強制と浸透との拮抗関係のもとにベトナム語をローマ字表記した「クォックグー Quốc Ngữ (国語)」を育んできた。クォックグーは、最初フランスの政策意図によって利用されたが、その後ベトナム独立の礎としてとらえ返され、普及された。ベトナムは「国語」概念を持つ数少ない国の一つであるが、帝国のものとして形成された日本の「国語の思想」（イ・ヨンスク）とは異なる「国語の思想」の形成がそこには見られるといってよいだろう。ベトナム民主共和国および南北統一後のベトナム社会主義共和国における言語教育の最大の課題は、独立国家建設と結びついたこのベトナム語＝クォックグーの普及すなわち識字教育であった。

一方で、多数民族キン族の他に53の少数民族からなる多民族国家であるベトナム民主共和国およびベトナム社会主義共和国は、一貫して少数民族固有の言語尊重の理念を憲法で掲げてきている。学校教育においては、ベトナム語の普及と少数民族の言語の尊重の双方を位置づけ、少数民族居住地域では原則としてバイリンガル教育を実践してきた。「国語の思想」とこうした少数民族への言語政策とはどのように関わり合うのかなど興味深い。

ベトナムの言語教育をふりかえることによっ

*琉球大学教育学部　**2001年度琉球大学教育学部研究生、現ドンアイン沖縄文化経済交流センター日本語学校日本語講師
***琉球大学非常勤講師

て、単一民族国家幻想に支えられた「国語の思想」のもと戦前から戦後へと営々と行われてきた日本の国語教育を照らし返すことができるのではないだろうか。またこれからの多言語・多文化共生社会における言語教育のあり方を展望するうえで、さまざまな示唆が得られるのではないだろうか。

このような問題関心の出発点は、国語教室の梶村・村上が、ベトナムからの留学生Đồng Thị Thu Hàを研究生として受け入れ、共にベトナムの言語文化と教育の歴史について学び始めたことにある。本稿はĐồng Thị Thu Hàの研究生論文「入門期国語教科書の日越比較研究」をもとに、梶村・村上およびベトナム語を専門とする立場から那須が加筆したものであり、日越比較言語教育研究の端緒に位置づくものである。第1章はベトナムの入門期「国語」(注(2)参照、ベトナム語）教科書を考察するうえで基本となるベトナムの言語文化の特色を描きだしたものである（那須担当)。第2章は、この教科書の歴史的文化的背景をとらえるために、ベトナムの言語文化と教育の歴史を概観し、課題を見出したものである（村上・Đồng Thị Thu Hà担当)。第3章は、ベトナムの入門期（小学1年生)「国語」教科書を紹介している（村上・Đồng Thị Thu Hà担当)。第4章は、ベトナム社会におけるベトナム語の位置を確認し、併せて日本の入門期国語教科書との比較を通してベトナムの入門期「国語」教科書の特徴（言語観、言語教育観、教科書観）を明らかにしようとするものである（梶村担当)。いずれもベトナム語訳についてはĐồng Thị Thu Hàと那須が行い、最終的に那須が監修している。

〈注〉

(1) 野地潤家「国語教育のおける思考力－国語教育の遺産－」『教育学全集5 言語と思考』小学館、1968年初出、『野地潤家著作選集⑤国語教育史の探究』明治図書、1998年所収

(2) ベトナム国民が母国語を学ぶ教科書の意で「国語」教科書としたが、ベトナムの学校カリキュラムで日本の「国語」に相当する科目は「ベトナム語」となっているために、「国語」とカギ括弧づけで表した。また「ベトナム語教科書」を「国語教科書」と表することは、日本の「国語の思想」に基づいているともとらえられる。そのことへの意識化の意も含め、「『国語』教科書」としている。

第1章　ベトナムの言語文化の特色

本章では、ベトナム入門期「国語」教科書の考察に先立ち、ベトナムの言語文化の特色について、基本的なことをまとめておく。

1．分布

ベトナム語はベトナム社会主義共和国の共通語である。だから当該国の人口7800万人の言語である。母国語使用人口としては、ASEAN加盟10カ国の中でインドネシアに次いで多いことになる。国外に目を転じれば、1975年南北ベトナムが統一された後、難民として国を離れアメリカ・カナダ・オーストラリア・日本など第3国へ定住したベトナム人は約250万人に上る。とかくベトナム語は少数言語の範疇に入れられがちだが、国内外のベトナム語話者数は世界十指に入ると言われている。

2．系統

ベトナム語はオーストロアジア（南アジア）語族の「ヴェト・ムオン語派」に属する。国境を接するカンボジアの言語であるカンボジア語等モン・クメール諸語から派生したと見られている（以下の例参照)。

	カンボジア語	ベトナム語
「三」	bey	ba
「地面」	dey	đất
「子供」	kon	kon

その一方でベトナム語にはタイ諸語と音韻対応を示すものも若干存在する。タイ語はシナ・チベット語族に普遍的に見られる「声調」言語である。ベトナム語が属するオーストロアジア

語族にはない音韻現象である「声調」がベトナム語には備わっているのは、後代になってタイ語等声調言語と接触した結果であると考えられている。

3．声調

ベトナム戦争を長年取材した元朝日新聞記者の本多勝一はベトナム語を『鳥のさえずりのような世界で最も美しい響きを持つ言葉』と評した。ベトナム語は世界で最も音楽的な言語の一つであるとよく引き合いに出されるが、それは前述した「声調」という音声現象のためである。声調とは、一つの音節を音の高低または曲折によって区別することである。その声調がベトナム語には以下の６つある。

- 中位の高さの平らな声調で、日本語の平常の声の高さよりやや高い声調
- やや下降気味の低く平らな声調
- 低い中位の高さから休息に鋭く上昇し、最後で声門がピタリと閉じる
- 低い中位の高さからゆるやかに下降した後、はね上がるように再び初めの高さ近くまで上昇する声調
- 低い中位の高さのところから声帯の激しい緊張を伴なって上昇気味に始まり、中途でいったん声門が完全に閉じた後、緊張が解けると同時に急激に上昇する声調
- 声調の激しい緊張を伴って押し殺したように低く始まり急激に下降し声門は閉じたまま終わり開放がない声調

このような声調言語はシナ・チベット語族が分布する東アジア。東南アジアに圧倒的に多い。その中でも声調の種類の多さではベトナム語が一番である。中国語の方言である広東語は11種の声調を有していると言われている。しかしこの中には「入声」と呼ばれる閉鎖子音終わり(-p, -t, -k) も一つの独立した声調として数えられており、これを除かなければならないから７種、またこの内の１種は特殊声調であるから結局は６種となりベトナム語とまったくの同数となる。

4．借用外来語

ベトナム語語彙の約６割は中国語（漢語）である。通常これを「漢越」と称する。ベトナム語の中にこれほど多くの中国語が外来語として入ってきた理由は、漢代から五代（紀元前111～紀元938）にかけての約1000年間をベトナムは中国人に支配されてきたからである。日本語の中にも漢語からの借用は多いが、ベトナム語におけるそれには量的に到底及ばない。それは、ベトナム語は中国語と同じ単音節・孤立語系の言語であるため中国語を取り込み易いからである。

日本人がベトナム語を学習する際、この「漢越」語は大変覚えやすく飛躍的にボキャブラリーを増やすことができる。それを示すため以下幾つかの「漢越語」を列挙する。

イ）日本語と同じもの

Chú ý	[注意]	
San hô	[珊瑚]	
Ngạc nhiên	[愕然]	驚く
Nghiên cứu	[研究]	

ロ）意味が同じでも漢字の位置が逆のもの

Hòa bình	[和平]	平和
Ngoại lệ	[外例]	例外
Kinh nguyệt	[経月]	月経
Viên chức	[員職]	職員

ハ）日本語と意味・ニュアンスが違うもの

Bác sĩ	[博士]	医者
Phản phúc	[反復]	裏切る
khả năng	[可能]	能力
Xuất khẩu	[出口]	輸出

ニ）日本語にはないもの、或いは使用されなくなっているもの

Hải phân	[海分]	領海
Nghệ sĩ	[芸士]	芸術家
Nạn nhân	[難人]	被害者
Truyền hình	[伝形]	テレビ

以上見ていただければわかるように、ベトナ

ムは日本・中国・朝鮮韓国と並んで「漢字文化圏」の一国なのである。それがために興味深い現象がある。日本は明治維新の折多くの西欧の技術・思想を吸収したが、その際日本語にはない概念を漢字を用いて新たに翻訳をした。つまりその時に日本生まれの漢語がたくさん生まれたわけだが、その漢語が中国に逆輸入されベトナムにまで伝えられたものが数多くある。以下、その例を挙げる。

Culture → Văn hóa [文化]
Labor → Lao động [労働]
Principle → Nguyên tắc [原則]
Communism → Cộng sản [共産]

また、なかにはベトナム人自身の手によって創造された漢語も若干存在する。

Lịch sự [歴事] 礼儀正しい
Quan trọng [関重] 重要な
Hãnh diện [倖面] 誇らしい

5．方言

北部方言・中部方言・南部方言の3つに分けられる。この3つの方言は、声調・音節頭子音・単語によって区別される。

イ）声調

ハノイを中心とする北部弁は前述した6種類の声調を厳密に区別する。その一方、フエを中心とする中部弁とホーチミン市を中心とする南部弁は、『低い中位の高さからゆるやかに下降した後、はね上がるように再び初めの高さ近くまで上昇する』声調と『低い中位の高さのところから声帯の激しい緊張を伴なって上昇気味に始まり、中途でいったん声門が完全に閉じた後、緊張が解けると同時に急激に上昇する』声調が区別されず一つの声調となってしまっている。

ロ）音節頭子音

北部弁は音節末子音の区別は厳密であるが音節頭子音の区別は失われている。逆に中部弁と南部弁は音節頭子音の区別をかなりの程度まで守っているが、音節末子音の区別は厳密さを欠いている。

ハ）単語

北部弁と南部弁では単語自体がまったく異なる例が少なくない。

	北部弁	南部弁
苦瓜	Mu'ó'p đắng	Khổ qua
コップ	Cốc	Ly
靴下	Tất	Vớ'
傘	Dù	Ô

6．詩と押韻

ベトナムは「詩と竹の国」と冠されて紹介されることが多い。竹のようにしなやかで強く詩を愛する人々の国、というベトナムの特徴を表している。実際に竹林はどこにでも目につく。竹材は大は家や舟、小はアクセサリーにいたるまで何にでも利用されている。また、確かに誰もが詩を好きだし、故ホーチミン主席も第一級の詩人であった。即興の詩のかけあいを聞くこともあるし、詩に託して愛を伝えるカップルも多い。

ベトナムの詩が殊ほど注目されるのは、ベトナム語の声調と詩の形式と押韻が三位一体となってまるで音楽のようにメロディアスに聞こえてくるからである。ベトナム文学史上最高傑作といわれる『Kim Văn Kiều（金雲翹）』もこの体裁をとっている。

イ）形式

六八体と双七六八体の2つの形式がある。六八体とは、六言の句と八言の句が腰韻（句の途中に踏む韻）と脚韻（句末に同じ韻を踏む）を踏みながら交互に交代していく形式である。六言の句の最後の音と次の八言の句の6番目の音が韻を踏み、その句の最後の音と次の六言の句の最後の音が韻を踏むというように、複雑な韻を踏みながらメロディーを紡ぎだしていくわけである（下図参照）。

○ ○ ○ ○ ○ ●
○ ○ ○ ○ ○ ● ○ ◎
○ ○ ○ ○ ○ ◎
○ ○ ○ ○ ○ ◎ ○ ◇
○ ○ ○ ○ ○ ◇
○ ○ ○ ○ ○ ◇ ○ ◆

これに対し、双八六体は、六言の句と八言の句の上に七言の句が２つ乗っかっているものである。あとの方の七言の句の最後の音が次の六言の句の最後の音と韻を踏み、次の八言の句の６番目の音と韻を踏む。このようなパターンを繰り返しながら詩を詠んでいくわけである（下図参照）。

○○○○○○○
○○○○○○●
○○○○○●
○○○○○●○○

六八体の形式は「伝」と呼ばれ、小説的な物語性を持った長編叙事詩を作るのに適している。双八六体の方は「吟」と呼ばれ、煩悶、憂愁、悲恨といった心情を詠う詩を作るのに適している。なぜなら、六八体が６・８・６・８・という安定したトーンで進むのに対し、双六八体では七言の句が２行入ることによってリズムに乱れが生じ、これが千々に乱れた心情を表すのに適しているからである。

最後に参考までに全編3254行にわたる長編叙事詩『Kim Văn Kiều（金雲翹）』の一節を掲げる。

Nhà vườn mở tiệc đoàn viên
Hoa soi ngọn đuốc hồng chen bức là
Cùng nhau giao bái một nhà
Lễ đà đủ lễ đôi đà xứng đôi
Động phòng diu dặt chén mồi
Bâng khuâng duyên mới ngậm ngùi tỉnh xưa

〈参考文献〉

『ベトナムへの旅』ジャパンプレスサービス、1978
Nguyen Du『Truyen Kieu』Nha xuat ban van hoc、1979
藤井友子『漢字音日中朝ベトナム共通語彙408』朝日出版社、1986
大野徹編『東南アジア大陸の言語』大学書林、1987
『言語学大辞典』三省堂、1992
皆川一夫『日常生活の中のベトナム語』国際語学社、1997
『言語』1998年5月号
国際交流基金アジアセンター編『ベトナム文学を味わう』、1998
冨田健次『ヴェトナム語の世界』大学書林、2000

第２章．ベトナムの言語文化と教育の歴史的背景

ベトナムの入門期国語教科書を考察するにあたり、本章ではベトナムの言語文化の歴史的背景を簡単にふりかえっておきたい。

ベトナムの言語文化の歴史に関する先行研究としては、まず1970年代の研究として、広木克行の一連の研究「ベトナムにおける母国語教育思想の展開」（1973）、「ベトナムにおける少数民族の自治と文字の創造」（1973）、「ベトナムにおける母国語の解放と教育」（1975）がある。これらは、1945年「独立宣言」以降のベトナムの母国語教育を国民教育思想との関わりからとらえたものである。言語学の立場からベトナム語の歴史に触れた研究としては、冨田健次「ベトナムの言語」（1987）がある。1990年代には、ベトナムの言語文化の発展とナショナリズムの関係をとらえた研究が行われている。クォックグーの発展とナショナリズムの展開との関わりを描きだした今井昭夫「ベトナムの言語と文化－クォックグーの発展とナショナリズム－」(1997)、学校カリキュラムにおける漢字／漢文の位置づけを視点として「ベトナム語意識」とナショナリズムとの関わりを論じた岩月純一の一連の研究「『ベトナム語意識』の形成と『漢字／漢文』－『南風雑誌』に見る」（1995）、「『ベトナム語意識』における『漢字／漢文』の位置について」（1999）、「ベトナムにおける『近代的』漢文教育についての一考察」（2000）等がある。古田元夫『ベトナム人共産主義者の民族政策史－革命の中のエスニシティー』（1991）は、ベトナム人共産主義者の少数民族政策にふれる中で言

語政策についても述べている。また伊藤正子「社会主義国家の少数民族語政策ーベトナムのタイー・ヌン語の場合」(1999) は、「少数民族自身が国家の少数民族政策をどのように受容したか」を明らかにしようと、タイー・ヌン族が集住する地域でインタビュー調査を行っている。

本研究は端緒であり、これらに新たな知見を加えることはできない。本章ではこれらに拠りながら、ベトナムの言語文化の歴史的背景を概観し、課題を見出すにとどめたい。

以下、ベトナムの言語文化の歩みを辿る。

1．前近代の歩み

千年以上に及ぶ中国支配の影響下、ベトナム語の語彙の約6割は、漢語から移入されベトナム式に発音したものである。文字については、公式的な文字・文章は独立以降も長く漢字・漢文でありつづけた。1075年に始まり、1915年(中部では1918年) に廃止された科挙では、主に漢詩・漢文の力が測られた。漢詩・漢文学は口承文芸やベトナム独自の文字「チューノム(字喃)」による文学に対し「高級な文学」としての位置を占め、「それを通して中国文化を積極的に受容しようとする動きをもたらしたばかりでなく、中国への対抗意識を表明する媒体ともなった」(今井、1997) という。

「チューノム (字喃)」とは、ベトナム固有の言葉を表すために、漢字を複合したり、加工した文字のことである。「字喃」とは「話し言葉の文字」を意味し、「チューニョー (字儒)」(＝儒学者の文字) や「チューハン (字漢)」(＝中国の文字) と区別された。たとえば「năm [五]」は、「南五」と表され、「南」でベトナム式発音を、「五」で意味を表し、複合されている。10世紀頃から体系化され、その後次第に広まった。また「詩」といえばそれまで漢詩のことであったが、チューノムで書かれた詩は「国語 (クォックグー) 詩」または「国音 (クォックアム) 詩」と呼ばれ、漢詩と区別された。18世紀から19世紀半ばに最もチューノム文学が栄え、チューノムによる韻文物語「金雲翹」(グエン・ズー) はベトナム古典文学の最高傑作といわれている。しかしながら、チューノムは「筆角も多く極めて繁雑で、しかも、漢字、漢文の素養がなければほとんど理解できない性質のものであり、とうてい大衆の受け入れるところはなり得」(冨田 (1987)) ず、衰退していった。

2．「クォックグー　Quốc Ngữ (国語)」と教育

「クォックグー　Quốc Ngữ (国語)」とは、漢語の「国語」のベトナム読みであるが、ベトナム語をローマ字表記した文字のことを指している。したがって日本における「国語」概念とはやや異なるといえよう。

ベトナム語のローマ字表記化は、17世紀中葉にはキリスト教宣教師達によって布教のために行われていた。19世紀後半フランスの直轄植民地となったベトナム南部 (南圻　コーチシナ) では、1865年、クォックグーによる官報「嘉定報 (Gia Định Báo)」が創刊され (サイゴン)、植民地政策の宣伝媒体とされた。南圻では1860年代に科挙が廃止され、中国の文化的影響力の排除がめざされた。植民地政策でクォックグーの学習が奨励された理由としては、「漢字より学びやすいのでフランス人行政官がそれを学んで、ベトナムの出版物をよりコントロールしやすくするため、また、ベトナム人にローマ字表記を教え込むことによってフランス語やさらにはフランス文化を導入しやすくするため、などの理由」(今井、1997) があげられている。1864年に、クォックグーの読み書きを教える小学校の設立が布告されたが、クォックグーは未だ限られた層で使用されているにすぎなかった。

北圻 (トンキン)、中圻 (アンナン) では、科挙は廃止されず、漢字は依然として公式の文字であったが、1903年にはフランス語とクォックグーの試験にも合格することが官僚に採用される条件とされ、次第にクォックグーは科挙においても位置づけられるようになった。1910年代にはクォックグーは次第に浸透し、1910年代末にはベトナム語の文字表記として揺るぎない地位を占めるようになっていた。

1906年に行われた第一次教育改革では、伝統

的な漢文教育を行っていた既存の学校のほかに「仏越学校」という体系が設定され、「ベトナムの近代公教育の淵源」となった。仏越学校では、「小学」ではフランス語の学習が大部分を占め、ベトナム語（クォックグー）と漢字の学習時間は少なかった。既存の学校でも、漢字・漢文教育は後退し、クォックグーの学習に最も多くの時間がさかれるようになった。

1917年の第二次教育改革の実施にともない、科挙は完全に廃止され、漢文教育を行っていた学校はすべて「私学」とみなされるようになり、公教育は仏越学校に一本化された。この仏越学校は、教育内容にも厳しい制限があり、全人的な教養は最大限排除され、実学的な知識の教授に限定され、教室での使用言語は原則的にフランス語とされるなど、植民地差別に貫かれた教育が行われた（岩月、2000）。クォックグーは「クォックヴァン　Quôc Văn（国文）科」においてしか用いられなかった。1924年には、初等教育３年間はベトナム語（クォックグー）で教えられるようになったが、２種類ある小学校の内「兼備小学校」では、第４・５年次はフランス語で全ての教科を学ばなければならないため、農村部の多くの子どもはついていくことができなかったという。クォックグーはさらに普及したが、当然のことながら植民地当局はクォックグーよりフランス語を重視しており、クォックグーは「フランス語を普及するための導入役」として位置づけられた。

この時期、言語問題はベトナム知識人の大きな関心事であり、植民地当局の宣伝機関誌として創立され、「アンナンの国文とするためにクォックグーの文を洗練することにとくに留意する」ことを編集方針に掲げた『南風』誌上等で、初等教育における言語教育をどうするかという問題が論じられた。「国魂は言語・文学にはない」としてフランス語を学ぶことによって開花・富強を速やかに図るべきという意見に対し、クォックグーで教えれば子どもは直接理解できるとして、クォックグーによる教育を主張する意見が論じられ、当時の知識人の間ではクォックグーの教育・普及を重要とする考えが大勢を占めていた。この時期にはまた、ベトナム語の統一の問題が論じられ、南圻、中圻、北圻の三圻の話し言葉の共通化とクォックグーの表記の統一が課題とされた（岩月、1995）。

1930年代には「クォックヴァン（国文）」教育が次第に整備されていった。ベトナム語とフランス語の教科書も整備されるようになり、小学校のベトナム語教科書「国文教科書」は1930年代に完成し、三圻で統一的に使用されるようになった。今井（1997）に拠れば、「中学」レベルでベトナム語をきちんと教えないことへの不満の声が出るようになり、中圻人民代表院（諮問的機能のみを有す中圻における議会）は、「小学」と「中学」において「漢越科」を教えるよう求め、1938年高等小学校の「越文」の内容が規定された。ついで中学校の「国文」の内容も、第一学年口承文学、第二学年中国文学の影響、第三学年現代文学として定められ、「国文」教育が徐々に整備されるようになった。「漢越」「越文」「国文」の科目名の意図と各々の内容についてさらに確かめる必要があるが、今後の課題としたい。

3．クォックグーの識字運動

ベトナムの共産主義者たちは、クォックグーを民衆の識字化の視点から重視し、クォックグーの普及に精力的に取り組んだ。1920年代後半から始められた「プロレタリア化運動」では「夜学運動」や「クォックグーを学ぶグループ」などが組織され、識字運動は革命運動の礎として推進された。ホーチミンが1941年にベトナムに帰国したとき最初にしたことも識字学級を組織することであったという。1930年に成立したインドシナ共産党は、母国語による教育と非識字状態の解消を方針として掲げている。

非識字者が総人口の大部分を占めていたといわれる1930年代末のベトナムにおいて「クォックグー普及会」が北圻ハノイで結成され（1938年）、1944年には「南圻クォックグー普及会」が成立した。フランス植民地当局は、日本による日本語教育に対抗し、ベトナム人を懐柔するためにクォックグー普及運動の拡大を是認した。

「クォックグー普及会」の教室では、アルファベット順に教える方法ではなく、民衆に親しまれている伝統的な口承文芸の形式を用いる教授法が採られた。この方法は、独立以降のベトナム民主共和国の識字運動でも採用された。民謡の節にのせてつぎのように歌うのである。

「i と t はふたつのカギよ、
i は短く点がつき、t は長くて交わるよ。
o は丸い卵のようで、
ô は帽子をかぶっているし、
o' は口ひげつけている。……」

民衆の口承文芸の土台に根ざした識字教育の教授法としてユニークであり、注目される。(広木 (1975) 参照。)

「クォックグー普及会」は全34課の教科書「クォックグー」を編纂し、独立以降も識字運動は「クォックグー普及会」の進め方が継承されることとなった。

4. 独立以降の母国語教育

1945年の八月革命によって植民地体制が打倒され、9月2日ホーチミンが独立宣言を読み上げ、ベトナム民主共和国(いわゆる北ベトナム)が樹立された。が、1946年12月には再植民地化をねらうフランスとの戦争に突入しなければならず(第一次インドシナ戦争、1954年終結)、独立の維持は困難を極めた。

独立直後、ベトナム民主共和国政府は日本軍の米略奪による深刻な飢餓への対策とともに、識字運動を喫緊の課題として最優先して取り組んだ。また大学をも含む全ての学校で、教室での使用言語はベトナム語とされた。1945年9月、識字運動に関する布告が次々と出され、平民学務局の設立や農民と労働者のための夜間の学級の設立、1年以内に8歳以上の人は全てクォックグーの読み書きができなければならないなどが定められた。

1945年10月、ホーチミンは識字運動のアピールを出した。全文を掲げる。注

ベトナム国民の皆さん、

かつて、フランスが我が国を統治していた時代、彼らは愚民政策をとった。彼らは学校を新たに建設することを制限し、わが国民をだまし、搾取しやすくするために、我々が字を学ぶことを快く思わなかった。

未就学のベトナム人の数は国内の人口に比べて95パーセント、つまり、殆どのベトナム人は非識字者であった。そのような状況で、どうして進歩することができるであろうか。

今日我々は独立を勝ち取ることができた。今急いで実現しなければならない事業の一つは、国民の知的水準の向上である。

政府は一年以内を限度として、全ての人びとがみなクォックグーを知らなければならないこととした。政府は、人民の学習を支援するために平民学務局を設立した。

ベトナム人民の皆さん、
独立を強固に維持したければ、
富国強民にしたければ、
すべてのベトナム人は、自分の権利、自分の義務を理解し、国家を建設する事業に参加できるように新しい見識を持たなければならない。そして、何よりもまず、クォックグーを読み書きできなければならない。

既に文字を知っている人びとは、まだ文字を知らない人びとに教え、平民教育に協力して下さい。

まだ文字を知らない人びとは、努力して知るために学ばなければならない。妻が知らなければ夫が教え、弟が知らなければ兄が教え、父母が知らなければ子が教え、使用人が知らなければ主人が教え、生活に余裕のある人は自分の家に学級を開き文字を知らない人びとに教えなければならない。

女性の皆さんは、過去長い間、家庭に縛られ進歩がなかったので、さらに学ぶ必要がある。今こそ皆さんは、自分が国における一構成分子にふさわしく、選挙権と被選挙権を持つために、男性に追いつくために、努力しなければならない時である。

このことをどうか青年男女の皆さん、積極的に自分の力で努力してください。

1945年10月

ホーチミン

内面的にも被植民化された状態を意識化する手段として識字の意義があること、独立を維持し新たな国づくりに向け国民意識を形成する教育と識字運動が一体であった事情がよく伝わってくる。この呼びかけを受け、1946年憲法18条では「被選挙人は選挙権を有す人でなければならず、21歳以上で、クォックグーの読み書きを知らなければならない」と規定された。

「クォックグー普及会」の教科書「クォックグー」は、新たな国づくりに向け改編されて用いられ、「わが国は自由」(11課)、「革命はわが人民に自由・幸福をもたらした」(30課)、「わが国は民主共和国。誰でも国会に選ばれる。頑張って次を習い、投票用紙に書けるようにしよう」(33課)などが加えられた。識字運動のためにあらゆる工夫がなされたが、クォックグーの読み書きが出来ない人は、むら(社)が割替する公田の分配分を失うなど時に強制的手段が採られることもあったという。

第一次インドシナ戦争の勃発によって、一時的に識字運動は停滞を余儀なくされたが、「学ぶことは抗戦することだ!」「字を知ってはじめて抗戦は勝利できる!」などのスローガンによってさらに識字運動は推進され、1959年頃には平野部でほぼ非識字者がいなくなり、1965年には山岳地方低地部における少数民族の非識字状態が基本的に完了したと宣言されるに至った。他のアジア諸国に比べたとき、今日においてもベトナムの識字率は高いとされるが、ストリートチルドレンの増加など社会矛盾によって非識字状態に置かれた人びとは決して少なくはないだろう。識字運動の伝統を踏まえ、今日の識字教育の現況については、次の課題としたい。

広木(1975)は、こうしたベトナム民主共和国の識字運動について「民族自決権主張の不可分の構成部分である民族の教育権の具体的実践であるという自覚に支えられた国民教育建設の運動であったといって良いであろう」と国民教育の観点から評価を行っている。P・フレイレらによる第三世界における識字教育思想の深化を踏まえ、さらにその意義を検討することが必要であろう。

5. ベトナム民主共和国の少数民族への言語政策

ベトナム民主共和国および南北統一後のベトナム社会主義共和国の言語政策として注目されるのは、一貫して少数民族固有の言語を尊重する言語政策をとってきたことである。

ベトナムでは、多数民族キン族の他に53の少数民族が存在し、少数民族の民族語の尊重を言語教育の基本方針として掲げつつ、共通語としてのベトナム語の「純粋化」と「基準化」を押し進めてきた。

ベトナム民主共和国の1959年憲法では「各民族は風俗習慣を維持または改善し、話し言葉、文字をもちいて自己の民族文化を発展させる権利を有す。」の一文があり、ベトナム社会主義挙和国の1980年憲法では「各民族は話し言葉、文字を用いて、自己のよき風俗、習慣、伝統、文化を維持し発揮する権利を有す。」、1992年憲法5条では「各民族は話し言葉、文字を用いて、民族的特色を維持し、自己のよき風俗、習慣、伝統と文化を発揮する権利を有す。」と定められている。1980年には少数民族の文字に関する政府決定が出され、まだ文字を持っていない民族は、ローマ字表記の文字をつくるよう援助を受けることができると定められた。

学校における民族語の使用についても、1952年党政治局で「すでに文字のある少数民族はその文字を用いて初等クラス(普通学校の小学校レベル)において学校で教える。固有の文字のない民族に対してはクォックグーの文字を用いて地方語を翻訳し、教える」という決議が出されるなど積極的に位置づけられ、実際に民族語文字を教えることは1956〜57年頃から実施されるようになったという。

民族語が尊重される一方、ベトナム語の共通語化も推進され、1968年出された政府首相の指示48号は、「見識を向上させ、文化を交流し、共通の祖国意識を高めるために、共通の話し言葉と文字を広めるのを重視しなければならない」

としている。1980年に出されたベトナム政府の第53号決議第１項目は、「普通語とその文字は、ベトナム国民共同体の共通の言語である。それは、全国の各地方、および各民族間のの不可欠のコミュニケーション手段であり、各地方および各民族が、経済、文化、科学技術などの面で同等の発展をとげ、全人民の団結を強化し、諸民族間の平等の権利を実現するのを助ける。したがって、すべてのベトナム公民は、普通語とその文字を学習し使用する義務と権利を有している。」とベトナム語普及を強調している。第３項目では、「少数民族の居住区では、小学校および成人学級初級課程で、民族語文字を普通語文字とともに教育し、学習者が民族語文字を理解するとともに、すみやかに普通語文字をマスターできるための有利な条件をつくる」という２言語併用教育の原則が提示されている。1991年８月に公布された小学教育普及法４条でも「小学教育はベトナム語で行われる。各少数民族は、小学教育を行うために、ベトナム語と共に自分の民族の話し言葉と文字を使用する権利を有す。」とある。

古田（1991）は、ジュネーブ協定以降のベトナムの民族政策を第Ⅰ期（1954～64年）、第Ⅱ期（1965～78年）、第Ⅲ期（1978～89年）に分け、第Ⅰ期について「理念的には、初等教育における母語教育の確立が指向されていたわけであるが、実際には民族語で教育を行える教員の不足や民族語教材の不足などのために、母語教育の普及には限界があり、学校教育の普及はおもにベトナム語の普及に結びつく傾向が強かった」と述べ、また第Ⅱ期の特色を「民族語の発展という理念を（中略）包含しつつもベトナム語の普及が言語政策の軸になったことは明確であろう。」と述べている。さらに第Ⅲ期については、ベトナム語を諸民族の「共通語」として発展させるという点で第Ⅱ期の政策を引き継ぎつつ、ベトナム語の「雑種性」こそその「純潔性」の中身であるとする論点など「ベトナムを構成している多元性を認めたうえでの統合を追求する」特徴を持つと指摘し、理念的には母語教育の確立を指向しつつ次第にベトナム語の普及に力点が移っていく過程をとらえている。伊藤（1999）は、これらの言語政策が少数民族側にどのように受けとめられていたかについて、実際にベトナム最大の少数民族タイー・ヌン族が集住する地域でインタビュー調査を行い、「ベトナム国家の下で生きるための効率を優先して、自分達の言語を教育の場で学ぶことに積極的でない者が多い」との結果を導き出している。少数民族の声をさらに深く聴きながら、他地域・他民族についても伊藤の調査を検証する必要があるだろう。

６．課題

以上の歴史を踏まえ、今後日越比較国語教育研究を進めていく上で深めるべき課題をあげておきたい。

(1) 日本では帝国の思想と不可分に「国語」概念を発展させ、帝国が崩壊した第二次世界大戦以降も「単一民族国家」幻想に支えられながら「国語の思想」（イ・ヨンスク）を長く維持してきた。一方、ベトナムでは被植民化から独立を勝ち取る過程で、当初はフランス支配の道具とされた「クォックグー　Quốc Ngữ'（国語）」の意義がとらえかえされ、また「クォックヴァン　Quốc Văn（国文）」教育が整備されていった。帝国のものとは異なる「国語の思想」を育んできたといえるだろう。各々の「国語」ないし「国文」概念を比較し、「国民」形成との関わりをさらに明らかにする必要があるとともに、呼称の問題にとどまらず、言語教育の教育内容に立ち入ってその「国語の思想」を検討する必要があるだろう。（教科書の考察を行う本研究は、この端緒として位置づく。）

(2) クォックグーは、言文一致に近い表記を可能とした表記法である。このクォックグーによってベトナム民主共和国およびベトナム社会主義共和国では、精力的に識字運動に取り組んできた。日本における戦後「国民教育」運動における言語教育の主要な関心と比較するとき、どんなことが浮かびあがってくるだろうか。また先に述べたように第三世界の教育思想家によって識字教育の思想と方法とが深められてきた今日、

ベトナムにおける識字運動に託されてきた願いやその方法、あり方等について、さらに考察を深める必要があるだろう。

(3) 日本では「国語の思想」のもと民族語や地域語を抑圧し、その尊重に長く無自覚でありつづけてきた。一方5．で見たように、ベトナムでは少数民族の民族語の尊重の方針を掲げ、少数民族の文字の創造にも取り組み、学校教育においても民族語の教育を位置づけてきた。今後、ベトナムの言語教育、とりわけ少数民族の住む地域における言語教育の現場の具体に立ち入って、その意義と課題・問題点を考察する必要があるだろう。このような歩みと課題をふりかえることによって、多言語多文化時代を展望する日本の言語教育への示唆も見出されえよう。

〈注〉

Hồ Chí Minh、"CHỐNG NẠN THẤT HỌC（無学をなくすために）", 1945年10月4日, "HỒ CHÍ MINH TOÀN TẬP 4（ホーチミン全集4巻）", NHÀ XUẤT BẢN CHÍNH TRỊ QUỐC GIA, HÀ NỘI -2002, 36-37頁.（那須泉訳）

〈参考文献〉

広木克行「ベトナムにおける母国語教育思想の展開」、『国民教育』第18号、1973

広木克行「ベトナムにおける少数民族の自治と文字の創造」、『月刊アジア・アフリカ研究』第13号、1973

広木克行「ベトナムにおける母国語の解放と教育」、小沢有作編『民族解放の教育学』亜紀書房、1975

冨田健次「ベトナムの言語」、大野徹編『東南アジア大陸の言語』大学書林、1987

古田元夫『ベトナム人共産主義者の民族政策史ー革命の中のエスニシティー』大月書店、1991

今井昭夫「ベトナムの言語と文化ークォックグーの発展とナショナリズムー」、小野沢純編『ASEANの言語と文化』高文堂出版社、1997

岩月純一「『ベトナム語意識』の形成と『漢字／漢文』ー『南風雑誌』に見る」、『東南アジアー歴史と文化』24号、1995

岩月純一「『ベトナム語意識』における『漢字／漢文』の位置について」、『ことばと社会』1号、1999

岩月純一「ベトナムにおける『近代的』漢文教育についての一考察」、木村汎他編『日本・ベトナム関係を学ぶ人のために』世界思想社、2000

伊藤正子「社会主義国家の少数民族語政策ーベトナムのタイー・ヌン語の場合」、『ことばと社会』2号、三元社、1999

第3章．入門期「国語」教科書の考察

本章では、日本における文部科学省に相当する教育人材育成省（BỘ GIÁO DỤC VÀ ĐÀO TẠO）が発行し、ベトナム全土の小学校で現在用いられている1年生用教科書『Tiếng Việt 1 tập một chữ cái và vần 』（『ベトナム語1 第1巻 文字と韻』2000年発行）および『TiếngViệt 1 tập hai vần - tập đọc 』（『ベトナム語1 第2巻 韻と読み方の練習』2000年発行）を対象とし、入門期「国語」教科書のあり方について考察したい。

1．科目名について

ベトナムの「普通学校」は、小学校1～5年、中学校6～9年、高等学校10～12年からなる。1995年現在の小学校のカリキュラムをあげておく。注

小学校の各教科と週当たり授業時間数（1995）年現在

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年
ベトナム語	12	10	10	8	8
数　学	9	4	5	5	5
道　徳	1	1	1	1	1
自然・社会	1	1	1	2	2
労　働	1	2	2	3	3
芸　術	2	2	2	2	2
保健・体育	2	2	2	2	2
計	28	22	23	23	23

1．1単位時間は40分。
2．上記の教科以外に、教科外活動として集団活動、テーマ学習、趣味活動、国旗敬礼、クラブ活動の時間が設定されている。

〈注〉文部省編『諸外国の教育事情ーアジア・オセアニア・アフリカ』1996年

今日、日本における「国語」に相当する科目は、小・中・高等学校課程とも「Tiếng Việt (ベトナム語)」という科目名となっている。ここで、「国語」をベトナム語読みした「quốc ngữ」と「tiếng」の意味内容の相違を確認しておく。

ベトナム語辞典を繙くと、「quốc ngữ」の項は「1 (id.) Tiếng nói chung của cả nu'ó'c .2 (kng.) Chữ quốc ngữ (nói tắt)」(「1 (稀に用いられる) わが国の話し言葉。2 (口語) 国語の文字 (省略形)」) とある (Viên ngôn ngữ học編『Từ Điển Tiếng Việt』)。越英辞典には、「the phonetic remdering of Vietnamese into the Roman alphabet; Latin-based phonetic in which Vietnamese in written, romanaized script, national language , Roman alphabet used as official writing system in Vitnamese;」(Bu i Phung 編『Từ Điển Việt -Anh』) とある。以上より、「quốc ngữ」は日本の「国語」(わが国の言葉) とほぼ同様の意味内容で使われる場合もあるが、一般にはベトナム語をローマ字表記した文字体系を指すととらえられるだろう。一方、「tiếng」は「Ngôn ngữ」(前掲『Từ Điển Tiếng Việt』) とあり、広く言語一般を指す。

科目名が「Tiếng Việt (ベトナム語)」となっているのは、副題が「chữ cái và vần (文字と韻)」となっていることからもわかるように、文字のみならず話し言葉の領域も含みこんだ内容となっているためと考えられる。さらにいうならば、日本における「国語」は単一民族幻想のもと国民共同体を自明の前提とし、ある種空気のように存在する概念としてあるが、ベトナムは多民族国家であり、ベトナム語を相対化する意識も働いたうえでのことなのか。例えば現在私の手元にある1957年発行の小学校5年生の教科書は「Quốc Văn (国文)」という科目名となっているが、いつ頃なぜ科目名が「Tiếng Việt (ベトナム語)」となったか、独立と国民意識の形成との関わりからさらに深めたいが、次の課題としたい。

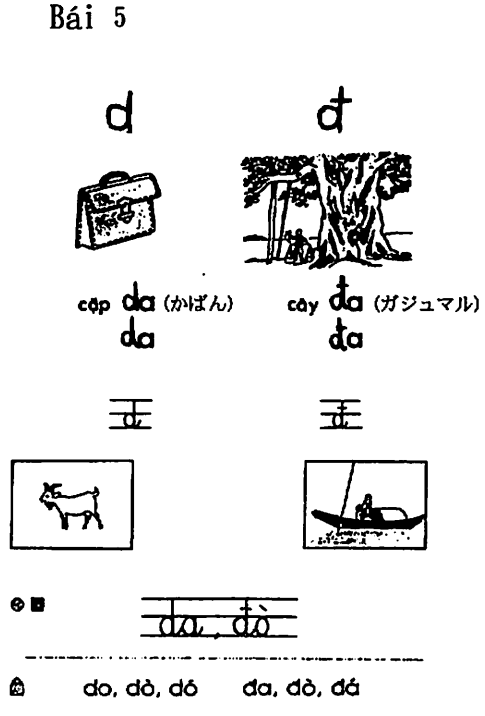
2．内容について

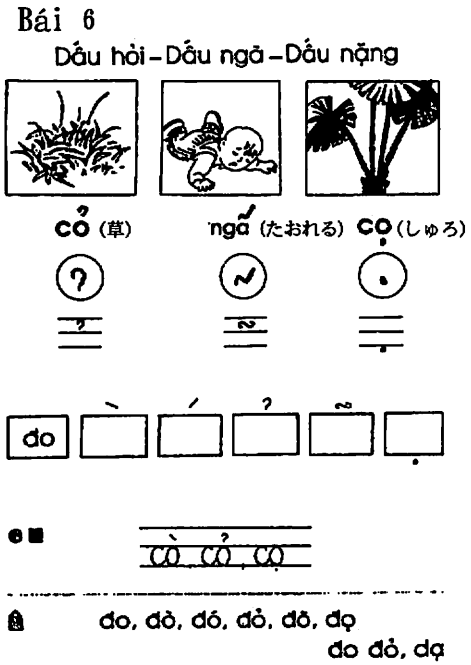
副題「文字と韻」(第1巻)「韻と読み方の練習」(第2巻) に、この教科書の内容が端的に表現されているといえよう。とくに目次はないが、項目毎に内容を整理すると以下のようになる。

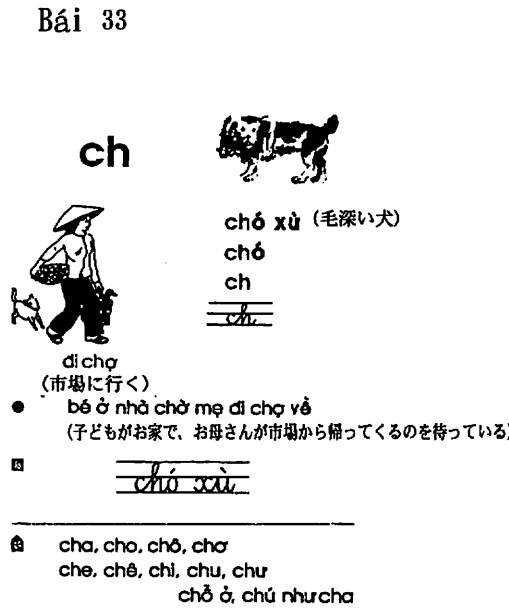
①声調 (1～7課)

o a c d đ の5つの文字と、それぞれ6つの声調について学ぶ。

例として5課と6課をあげる。( ) 内は日本語訳である。このように子どもたちの身近な風物をとりあげ、単語単位で示し、文字表記と発音を対応させる学習が位置づけられている。







②母音・子音の発音と文字（8課－41課）

つぎのグループ毎に母音・子音の発音の区別とそれに対応した文字表記を学習していく。ベトナム語においては、子音・母音と声調の組み合わせによって、意味がすべて異なってくる。その組み合わせによる違いを意識させることが、このユニットの主なねらいとなるであろう。各ユニット毎に復習が位置づけられている。

（ô o' ）（ e ê ）（ i t ）
（ n m ）（ u u' ）(y (i)) （ l ）（ b ）
（ v ）（ h ）（ k kh ）（ r ）
（ x ）（ s ）（ g gh ）（ gi ）
（ ng ）（ngh ）（ nh ）（ th ）
（ ch ）（ tr ）（ q qu ）（ p ph ）

最初のグループの（ i t ）より単語の例とともに簡単な文単位の例文が登場する。次第に語数の多い文となっていく。

33課（ch）の項をあげてみる。一文に、同じ子音と異なる母音を持つ語が必ず入っている。

③音韻（第1巻42－80課、第2巻81－125課）

注

音韻の学習に多くの頁が割かれていることに、ベトナムの入門期「国語」教科書の大きな特色があるといえるだろう。第1章で述べられているように、ベトナムは「詩と竹の国」と表され、日常の会話や文章においても韻律が重んじられる。入門期の段階から、このような韻律を意識した作文に慣れさせようとする意図が強く働いているといえるだろう。

（ an ăn ân ）（ on ôn o'n ）（ en ên ）
（ in ）（ un ）
（ ăm âm ）（ om ôm ŏm ）（ em êm ）
（ im ）（ um ）
（ ai ay ây ）（ oi ôi oi ）（ ui u'i ）
（ ao eo ）（ iu u'u ）（ au âu ）（ êu ）
（ ac ăc âc ）（ oc ôc ）（ uc u'c ）
（ at ăt ât ）（ ot ôt o't ）（ et êt it ）（ ut u't ）
(ap ăp âp) （ op ôp o'p ）（ ep êp ）
（ ip up ）
（ anh ênh inh ）（ ach êch ich ）
（ ang eng ）（ ăng âng ）（ ong ông ）
（ ung u'ng ）
（ ia ua u'a ）（ iêc iêp ）（ lên yên ）
（ iêm yêm ）
（ iêu yêu ）（ iêt yêt ）（ iêng yêng ）

(uôi uôm) (uôc uôt)(uôn uông)
(uo'i u'o'u)(u'o'c u'o't)(u'o'm u'o'p)(u'o'n u'o'ng)
(oa oe)(oai oan)(oac oat)(oăno ăt oang)(oanh oach oăng)
(uê uy uo')(uân uât uây)
(uyên uyêt)
音韻学習のためのいくつかの例文および訳をあげる。

Lan cho ngan ăn guin. Bà khen Lan.
ランはあひるにみみずを食べさせた。おばあさんにほめられた。

Thôn xóm đã lên đèn.
Co'm chín tho'm làn gió.
村にランプがついた。たきたてのごはんの香りがただよう。

Thôn em đổi mó'i
Đã có máy cày
Rồi ngày mai dây
Em ngồi cầm lái.
わたしの村が変わってきた。耕耘機がある。近い将来、わたしは運転する。

Thâu ỏi ta bảo trâu này,
Trâu ăn no cỏ trâu cày vó'i ta.
牛さん、聞いてね、
草をたくさん食べて、わたしといっしょに動いてね（はたらいてね)。

Măc gió núi đèo cao
Quân đi nhu' thác chảy.
山がいくら高くても、風がどんなに強く吹いても
軍隊は、滝が流れるように歩いていく。

Nhó' lò'i Bác dạy:
Chăm học, chăm làm
Bố mẹ đều khen
Thầy cô vui vẻ.
ホーおじさん（注 ホーチミン）が教えてくれたことを守ろう。
一生懸命勉強して、お手伝いをしよう。
そうすればお父さん、お母さんにほめられるし、先生たちもよろこぶよ。

Mặt tró'i lên ấm đất quê ta
Thôn xóm vui cầy cày gặt hái.
お日さまがわたしたちのふるさとにあたたかくのぼる
村は、楽しそうに収穫作業をする。

Cột cò' cao chót vót
Phần phật lá cò' bay.
高い旗（国旗)
風にひらひらしている。

Tró'i ren rét
Tết đến rồi
Đào, mai nở'
Thật là vui...
お天気は寒くなり、
お正月が来るよ
桃の花が咲く
とても楽しいよ…

Bé o'i! Bé dậy
Đến ló'p Mầm non
Con trâu tai vải
Con gà mào son
Đều đi cả rồi
Bé ỏi mau dậy!
ねぇ、起きて！
幼稚園に行かなきゃ。
水牛の耳が揺れているよ
赤いとさかのにわとりも鳴いているよ
みんなもう起きたよ
ねぇ、起きて！

Đoi dép đo'n so',
"Đôi dép Bác Hồ",

Đà đi khắp nẻo quê nhà, Bác o'i!
ホーおじさんのサンダル（注　タイヤから作った簡易サンダル）は、
田舎のどんなところにも行けるよ。

Búp sen nhỏ
Bên bờ' ao
Nhu' tay bé
Vẫy tró'i cao.
小さな蓮の蕾が咲いたよ
池のほとりに
子どもの手のように
空を仰いでいる。

Trung thu trăng sáng nhu' gu'o'ng
Bác Hồ ngắm cảnh nhớ' thu'o'ng nhi đồng,
中秋のお月様はまるで鏡のよう
ホーおじさんは、お月様をながめながら
子どもたちに想いをはせる。

音韻学習の最後に、以下の二つの文章（一つは詩）が復習として掲げられている。

Trăng sáng
Sân nhà em sáng quá,
Nhò' ánh trằng sáng ngò'i,
Trăng tròn nhu' cái đĩa
Lo' lửng mà không ro'i.
Nhữ'ng hôm nào trăng khuyết
Trông giống con thuyền trôi
Em đi trăng theo bu'ó'c
Nhu' muốn cùng đi cho'i.
明るいお月様
私のお庭はすごく明るい
お月様が照らしくれるおかげ
まあるいお月様はお皿のよう
お空に浮かんでるけど落ちてこない
三日月のかたちはお空に浮いた船みたい
お月様は一緒に遊びたいように私の後に
ついてくる

Năm điều Bác Hồ dạy:
- Yêu Tổ quốc, yêu đồng bào
- Học tập tốt, lao động tốt
- Đoàn kết tốt, kỉ luật tốt
- Giữ' gìn vệ sinh thật tốt
- Khiêm tốn, thật thà, dũng cảm
ホーおじさんの五つの教え
・国を愛し、国民を愛すること
・良く学び、良く働くこと
・仲良くし、規則を守ること
・ひかえめで、正直で、勇敢であること

③読み方の練習（第２巻　91－138頁）

読み方の練習として、36の文章が収められている。いずれも、既にある文章から採られている。目次をあげる。

1．僕の学校
2．新しい教科書
3．先生が教える
4．小鳥が勉強に励む
5．子どもたちに贈る
6．クワデーサー
7．月光を浴びて
8．学校へ行こう
9．2匹の羊
10．頭のいいカラス
11．お母さんの手
12．ハンモック
13．郵便配達のおじさん
14．川はぜ
15．太ったねずみ
16．おばあさんと孫
17．おもちゃ作り
18．家族のこころ
19．お母さんが帰ってきた
20．赤ちゃんとバラ
21．僕は夏が大好き
22．ひばり
23．僕のふるさと
24．雨の後に
25．友達
26．工場

27. 美しいタイグエン
28. ケーさん
29. キツツキ
30. お月様が僕の家の庭を照らす
31. 鉱山見学
32. カニのお目覚め
33. デルタの朝
34. ヴォー ティ サオさん
35. 農民と熊
36. 1年生へ贈る言葉

いくつかの訳をあげる。

1．僕の学校。
僕の学校は真っ赤な瓦。
緑一色の水田の中でひときわ目立つ。
風が稲穂をざわざわと揺らす。
学校へ向かう僕にあいさつをしてくれている。

2．新しい本
今日先生はクィンに新しい本「ベトナム語Ⅰ」を配りました。
クィンは教室を飛び出して急いで家に帰り、おばあちゃんとお姉さんに本を開いて見せました。新品の本、紙の匂い、きれいな挿し絵…。

5．子どもたちに贈る
このノートは、みんなからの贈り物だよ。
君たちが一生懸命勉強して
将来国の力になるように
というみんなからの思いがこめられているんだよ。（ホーチミン）

6．クワデーサー
校庭の真ん中に大きなクワデーサーが植わっている。
冬は、葉っぱがすっかり落ちた細い枝が伸びている。
春になると枝いっぱいに新芽が吹き出す。
夏は緑の葉っぱが校庭を覆って涼しくしてくれる
秋になると熟した黄色い実が葉っぱの間から見える。

11. お母さんの手。
赤ちゃんは長い間お母さんの柔らかい手で育てられる。
僕達が食べるご飯はお母さんの手で作られる。
僕達の飲む水は、お母さんの手で井戸から引き上げられ、沸かされる。
暑い日にはお母さんの手で扇がれる団扇で涼しくしてもらって僕達は眠りにつく。
寒い日にはお母さんの手で暖めてもらう。

16. おばあさんと孫
お母さんがジェウトゥーに1冊の本を持ってきた。「おまえが小さかった頃、おばあさんがいつもお話を聞かせてくれたんだよ。今おまえは大きくなって本も読めるし字も書ける。おばあさんに本を読んで聞かせておあげ。」
ジェウトゥーはおばあさんのところににじり寄って、「おばあさんここに座ってわたしがお話を聞かせてあげる。」

19. お母さんが帰ってきた
あ！お母さんが帰ってきた！
フオンとハーは声をあげて玄関までお母さんを迎えに行った。お母さんはお米を担いで帰ってきた。お母さんの服は汗でびっしょりで、顔は真っ赤...。
ハーはおうちに駆け込んで団扇を取って尋ねた。「お母さん疲れた？どうしてこんなに重いものを担いでくるの？お母さん座って。団扇であおいであげる。」

26. 工場
工場を見に行った。
街の郊外で自動車を修理している。
できたばかりの工場。
きちんと並んだいろいろな機械。
ゾーゾーと回っている。
ヒッヒッと音がなる。
シューシューと煙を吹き上げ。
ゴーゴーと鉄を溶かす。

騒々しいけど整然と機械は動いている。

28. ケーさん

ある夏の日の午後、ケーさんは人に頼んで泉から水を担いできてもらった。水が澄むのを待って掬いあげた。それからケーさんは子供たちを連れてきた。ケーさんは自分で水を掬って子供たち一人一人にかけて身体をきれいにしてあげた。

ケーさんとは、わたしたちが敬愛するホーおじさんでした。

以上の例文から読みとられることを、簡単ではあるがまとめる。

例文の内容は子どもの生活に根ざし、その発達段階を配慮したものとなっているが、基本的には子どもの側の論理より言語の側の論理＝声調・母音・子音・音韻の体系が優先された構成となっているといえよう。また、農村風景や労働を基本とし、お手伝いを奨励したり、目上の人を尊ぶなど儒教道徳が感じられる内容が多い。「お父さん」より「お母さん」をテーマとしたものが多いのは、ベトナム社会における女性の位置を反映したものであろうか。詩は位置づけられているが、物語がないことも注目される。日本に比べ、ベトナムでは未だ児童文学のジャンルが充分確立されていないためであろうか。今後の課題としたい。

「わたしの村が変わってきた。耕耘機がある。近い将来、わたしは運転する。」や「できたばかりの工場」が登場する例文からは、ドイモイ政策下工業化・近代化を担う人材づくり＝国民形成をめざす「発展途上国」の「今」がうかがえる。また入門期からホーおじさん＝ベトナム独立建国の父ホーチミンへの親しみや尊敬を呼び起こす例文が計６つ、国旗や軍隊に関する例文が各々位置づけられており、ベトナム国民としての意識形成のねらいがベトナム語学習の中で強く意識されていることがうかがえる。独立建国としての国民形成から「発展」を担う国民形成へ、その２種が混然一体となった「国語の思想」を本教科書に見ることができるといえよう。

〈注〉課の番号は、１巻・２巻通しとなっている。

第４章．入門期におけるベトナムの「国語」教科書の研究

はじめに

この章では、日本とベトナムの「国語」教科書の比較研究の一環として、入門期の「国語」教科書について取り上げ、日本の「国語」教科書との比較を通じてベトナムの「国語」教科書の特徴（言語観、言語教育観、教科書観）について検討しようとするものである。このような日本とベトナムの「国語」教科書についての比較研究は、これまで行われてこなかった。その理由は、いろいろ考えられるが、語学や資料的な制約が多いからであろう。我々の共同研究もベトナムからĐồng Thị Thu Hàという留学生を迎えたということが契機になっているが、那須泉という優秀なベトナム語の講師との出会いがなければ具体化しなかった。彼がたびたびベトナムに渡り、古書店でベトナム語の教科書を購入して提供してくれたことで資料の問題が解決した。また、彼は、文献を翻訳してくれると同時に、ベトナム語を理解する手ほどきをしてくれた。我々の共同研究はこのような条件がととのっていたので日越「国語」教科書の比較研究にも着手できたが、ベトナム語を学ぶ機会が少ない日本の大学の実情からすればベトナムの教育を研究する人数も限定されてしまい、このようなテーマについての先行研究がないことも理解されよう。

本研究の資料として使用する日本の「国語」教科書は、2001年１月20日に検定済みとなり、2002年度から全国の小学校で数多く使用されている、光村図書の『こくご　一ねん（上）かざぐるま』（以下、『こくご１上』と称する。）である。ベトナムの「国語」教科書は、第三章で紹介している『Tiếng Việt 1 TẬP MỘT Chữ cái và Vần』（『ベトナム語１　１課　文字と韻』、以下『ベトナム語１／１』

と称する。）を使用する。『ベトナム語１／１』は、ベトナム社会主義共和国の教育人材育成省が発行し、ベトナム全土で小学校１年生用として使用されている「国語」教科書である。両者とも、比較検討する際の資料としては、全国的に数多く使用されている教科書であるという意味で妥当なものと考えられる。検討に際しては、まず第一に多民族・多文化・多言語社会であるベトナムにおいて、キン族の民族語であるベトナム語を他の民族の子ども達も学習するのはどうしてかということを確認するためにベトナム社会におけるベトナム語の位置を把握し、次に『ベトナム語　１／１』と『こくご　１　上』を比較し、ベトナムの「国語」教科書の特徴を言語観や言語教育観、教科書観と合わせて検討していく。

１．ベトナム社会におけるベトナム語の位置

ベトナムは、多民族・多文化・多言語社会である。54の民族に分かれ、それぞれの民族が独自の民族語を有している。と同時に、文化面においても、民族のルーツの違い、同じ民族でも中国文化の影響の有無、宗教の違いなどがあり、それらが民族の文化にも及んで各民族の文化の多様性を作り出している。ここではまず、この節のテーマを考察するために、ベトナムの民族や民族語の実態を人口を含めて確認しておこう。

1989年段階のデータであるが、各民族の系統・民族名・人口は次のとおりである。

(1)オーストロアジア語族

①ベト・ムオン系

キン族（6500万人）、ムオン族（91万4000人）、トー族（５万1000人）、チュット族（2400人）

②モン・クメール系

クメール族（89万5000人）、バナ族（13万7000人）、ソダン族（９万7000人）、フレ族（９万4000人）、チョホ（コホ）族（９万2000人）、ムノン族（６万7000人）、スティエン族（５万人）、コム族（４万3000人）、ブルヴァンキエウ族（４万人）、チョトゥ（コトゥ）族（３万7000人）、ジエチエン族（２万7000人）、タオイ族（２万6000人）、マ族（２万5000人）、コー族（２万3000人）、チョロ族（１万5000人）、シンムン族（１万1000人）、カン族（4000人）、マン族（2300人）、ブラウ族（250人）、ロマム族（250人）、オズ族（100人）

③タイ・ターイ系

タイ族（119万人）、ターイ族（104万人）、ヌン族（70万5000人）、サンチャイ族（11万4000人）、ザイ族（３万8000人）、ラオ族（１万人）、ル族（3700人）、ボーイー族　（1450人）

④モン・ザオ系

モン族（55万8000人）、ザオ族（47万4000人）、パテン族（3700人）

⑤カダイ系

ラチー族（8000人）、コラオ族（1500人）、ラハ族（1400人）、プペオ族（400人）

(2)オーストロネシア語族

ザライ族（24万200人）、エデ族（19万5000人）、チャム族（９万9000人）、ラグライ族（７万2000人）、チュールー族（１万1000人）

(3)シナ・チベット語族

①漢系

ホア（華人）族（90万人）、サンジウ族（９万4630人）、ガイ族（1200人）

②チベット・ビルマ系

ハニ族（１万2500人）、フーラー族（6500人）、ラフー族（5400人）、ロロ族（3200人）、コン族（1300人）、シラ族（600人）

以上の54の民族の人口比からも分かるように、キン族が圧倒的多数を占めている。この傾向は、1999年の調査においても変わらず、ベトナムの総人口約7600万人のうちキン族が占める割合が約90パーセントである。ベトナム語は、このように圧倒的な人口を有するキン族の民族語である。政治・経済・文化などの領域におけるキン族の勢力の大きさもあり、各民族間のコミュニ

ケーションの手段として政治的にも位置づけられ、「ベトナム民族共通の一般的な言語」（ホアンヴァンハイン）と見なされている。そのことをベトナム社会主義共和国の政府委員会第53／CP号決定（1980年２月22日交布）は、次のように言う。

「普通語と普通文字はベトナム民族共通の一般的な言語である。各民族や各地域が様々な分野――経済・文化・科学技術・民族間の団結強化・各民族が平等である権利の確立――で一様に発展するために、それは相互の間で不可欠な交流手段となる。したがって全てのベトナム国民は普通語と普通文字を学習し使用する権利と義務があるわけである。」

ここで言う「普通語」とはベトナム語のことであり、「普通文字」とはベトナム語をローマ字表記したクォックグーのことである。このベトナム語とクォックグーが「ベトナム民族共通の一般的な言語」、つまり共通語としてベトナムにおいては使用されるということである。多くの民族を抱えるベトナムにおいて、各民族や各地域の間の調整のために共通語が必要とされるのは、意志の疎通や政策遂行などの面からも当然のことである。しかし、「様々な分野――経済・文化・科学技術・民族間の団結強化・各民族が平等である権利の確立――で一様に発展するために」という理由だけでは、ベトナム語とクォックグーを共通語にするには無理がある。なぜならば、ベトナム語やクォックグーは、キン族の民族語であり文字であるからである。このことは、1992年に制定されたベトナム社会主義共和国憲法の以下のような文言に抵触するのではないかという疑問を抱かせるものである。

「ベトナム社会主義共和国は、ベトナムの国土で各民族が共生していく統一国家である。国家は、各民族に対して平等な政策・民族間の相互団結を推進し、民族差別や民族間の不和を厳重に禁ずる。各民族は、言葉や文字を使う権利を有し、民族の特質を保ちつつ秀でた風俗・習慣・伝統・文化を発展継承することができる」

つまり、キン族という一民族の民族語であるベトナム語とクォックグーを「ベトナム民族共通語」として政治的に位置づけることは、各民族の言葉や文字を使用する権利を阻害し、民族の差別や民族間の不和をまねかないかということである。しかし、このことについて他の民族から不満があったという事実は確認されていない。それはなぜか。まず第一に「各民族は、言葉や文字を使う権利を有し、民族の特質を保ちつつ秀でた風俗・習慣・伝統・文化を発展継承することができる」と、ベトナム社会主義共和国憲法に記述されているからという理由が考えられる。そして、憲法で保障されているだけでなく、実際にベトナム語と各民族の民族語が同時に使用できるようにするために、小学校教育でバイリンガル教育が行われているのである。各民族にとって、自分達の言葉や文字を学習し、使用する権利が認められているのだから、特に不満を抱く必要がなかった。こういう理由が考えられるのである。第二の理由は、第一の理由の根拠の一つとも考えられるが、ベトナム語がベトナム全土で共通語としてコミュニケーションの手段として使用されていたということである。第三の理由は、ベトナム共産党及びベトナム社会主義共和国などの言語政策により、ベトナム語とクォックグーへの保護があったということである。「ベトナムにおける言語政策とその状況にかかる諸問題――現状と展望」（ベトナム国家人文社会科学センター言語学学院編『ベトナムにおける言語政策とその状況』2001年、社会科学出版社発行）を執筆したホアンヴァンハインの文章は、第二と第三の理由に関わるその辺の事情を次のように伝えている。

「確固たる方針を持ってベトナム語を保護し発展させた。つまり、植民地時代には排斥された一言語の地位から（当時は日常会話で使われる程度か、学校でも正規の科目としては教えられていなかった）国家組織の全ての業務で正式に使用される言語となった。と同時に、フランス語に代わって小学校から大学までの学校教育と社会に出てから使用する言語となった。そして言語政策のおかげで、ベトナム語は独自の特色と輝きを放ちだし、芸術文化や科学技術の活動にとって欠かせない強力な道具となった。人々

が日常生活でまたはメディアを通じて接する言葉の文化水準も明らかに高まった。これは、党・国家・国民にとって奇跡とさえ言える。」

つまり、植民地時代からすでに日常会話程度であってもコミュニケーションの手段としてベトナム語が使用されていたのである。と同時に、言語政策により公用語として使用されたり、学校教育の中で使用されたりするなどして、ベトナム語の普及浸透が進んでいたのである。現実にそのような状況がある以上、人口の約90パーセントを占める人間が使用しているベトナム語に代わるだけの言語を見いだすのは難しいだろう。また、さまざまな分野の書籍・文献などもベトナム語によるものが多いとすれば、統一国家ベトナムの政治・経済・文化などの分け前に均しく預かるためには、ベトナム語を学ばなければいけないということになる。政府委員会第53／CP号決定で、「全てのベトナム国民は普通語と普通文字を学習し使用する権利と義務があるわけである。」とされたのは、そのことを意味してのことだと考えられる。一方、そこでベトナム語を学習し使用する義務があるとされたのは、多民族・多文化・多言語社会であるベトナムの統一性を確保するためであろう。同53/CP号決定の中で民族間の団結強化のことも記述されているが、そのことを示しているだろう。また、ホアンヴァンハインは、先の論文の中で工業化・近代化を推進するドイモイ（刷新）期のベトナムの「言語政策において必ず実現しなければならない事項」の一つとして、国家概念と国家意識の重要さを次のように指摘しているが、そのような認識からもベトナム語の学習と使用の義務化の問題が出てきていることも考慮する必要があるだろう。なぜなら、日本において、「国語」を通じて帝国日本に相応しい国民の形成がなされていたという歴史があるからである。

「ベトナムは多民族・多文化・多言語を統一する国家である。それゆえ国家概念と国家意識は大変重要で各民族・国民の義務と権利の法的基盤を確立する拠り所とならなければならない。」

しかし、ここで注目しておきたいことは、ドイモイ期の言語政策は、国語による国民の形成という観点に加えて、ベトナムの工業化・近代化への貢献という観点からも、ベトナム語の普及浸透ということが主張されているという点である。『ベトナムの人々』（海外職業訓練協会編、2001年10月発行）の「第６章　学校教育」の記述によれば、工業化・近代化の要求に応えるために基礎教育のレベルで打ち出されている具体策として、「特に15歳から35歳までを対象に識字を徹底させる。その他の年齢層に対しても識字教育を行なう。」、「特に６歳から14歳までの子供を対象に、全国で小学校教育の普及を基本的に完成させる。」などのことが計画されている。ホアンヴァンハインも先の論文の中で、「言語に関して、ベトナム語は国家の言語であるという位置づけをまず行なう必要があ」るとした上で、「３　言語政策上の主な方針」として、「国家言語としてのベトナム語は、①各民族間のコミュニケーション手段（普通語）として、②国家機構の業務や対外業務の正式な言語として、③小学校から大学卒業までの学校での言語として、④文化・科学・芸術等の活動において有益な道具として、基本的な機能を果たす役割がある。」と主張しているのである。これらの動きを考慮して言えば、ドイモイ政策の進める国家の工業化・近代化に貢献するために、ベトナム語の普及浸透をさらに図ったり、その機能をさらに発揮させるためにベトナム語を国家言語にすべきだと言うことであろう。そうだとすると、帝国日本にふさわしい国民の形成という課題を背負った「国語の思想」とは異なる「国語の思想」が、ベトナムでは展開されていると言うことになる。同時に、指摘できることは、限定された資料からではあるが、ベトナムの各少数民族の子ども達がベトナム語を学ぶことの背景に、彼らを人材として育成し、ドイモイ政策に総動員させようという国家的意図があるということである。そして、このことは各民族や各地域において、一様に発展していく上で必要なことだと考えられているのである。それでは、以上のようなベトナム語の地位や事情は、ベトナムの「国語」教科書にどのように反映し

ているだろうか。次に、日本の入門期の国語教科書と比較して、ベトナムの入門期の「国語」教科書の特徴を見ていくことにする。

2．入門期のベトナムの「国語」教科書の特徴

二つの教科書を比較してみると、日本の光村図書出版の『こくご１上』はＡ５判サイズで、『ベトナム語１／１』 はＢ５判サイズである。それゆえ、『こくご１上』の方が字のサイズや挿絵も大きいので『ベトナム語１／１』よりも読みやすいということができる。しかし、『ベトナム語１／１』は、教科書のサイズが小さいために、光村の教科書よりも字や挿絵が相対的に小さくなっているが、強調したい字を赤や青や緑で印字したり、挿絵を光村の教科書と同様ふんだんに盛り込むなどの工夫が見られる。表紙も、光村の芸術性の高い表紙絵に対し、ベトナムのものは子どもを三人登場させてＡ、Ｂ、Ｃの各文字をそれぞれに持たせる絵を表紙絵としており、入門期の教科書として子ども達がその教科書に親しみを覚えるように配慮されているといえるだろう。

使用されている紙の質に注目してみると、光村のものはやや厚めの上質紙を使用し、『ベトナム語１／１』の方は中質紙を使用している。本の取り扱いになれていない子ども達であることを考えると、手触りもよく厚での丈夫な紙の教科書の方が入門期の教科書に相応しい。ベトナムで子供向けの出版物がどのようにして発行されているのか不明であるが、この点は今後の改善点の一つではないだろうか。経済面での向上が見られた時に、この紙質の問題がどうなるか注目したい。

次にページ数を確認してみると、『こくご １上』 は98ページ。『ベトナム語１／１』は124ページである。ちなみに『国語１下』は94ページで、『ベトナム語１／２』は140ページである。ベトナムの教科書の方が分量の面では光村のものより勝っている。これは、日本の場合2002年度から完全実施された小学校の学習指導要領が、週５日制の導入とそのもとでのゆとり教育の推進、「綜合的な学習の時間」の導入を行ったことの反映である。ベトナムの場合、そうした政策がとられていないし、教えるべき内容がそのまま教科書に反映した結果、ページ数が日本のものよりかなり多いということなのであろう。この分量を半年乃至一年の間にベトナムの子ども達がどのように消化しているのか、すぐには分からない。この点は聞き取り調査などを通じ今後明らかにしていきたい。

それでは次に、二つの教科書の内容を比較するために、まず目次構成がどうなっているか、みてみよう。

『こくご１上』の目次は、次ページに示したとおりである。

それでは、『ベトナム語１／１』 の場合はどうだろうか。第３章でも指摘しているが、特に目次は示されていない。それで内容の面から判断をして目次構成を示すと、①声調（１～７課)、②母音・子音と文字（８～41課)、③ 音韻（42～80課）というようになっている。副題は、「文字と韻」となっており、光村の教科書の副題「かざぐるま」のような文学的なものとは異なっている。このような違いはどこから来るのだろうか。それは、ベトナム語の特徴からきていることが考えられる。第１章で那須が指摘しているように、ベトナム語には６つの声調がある。そしてその発音の高低や長短に関係して意味が全く異なるという特徴がある。たとえば、「ｍａ」という単語は幽霊という意味をもつが、「má」というように早く鋭く上昇することを示す声調の符号「´」が付くと、それは母という意味の単語になるのである。したがって、ベトナム語においては、声調をはっきりと区別して発音しないと、言おうとする内容が相手に伝わらないので、それができるようになるための学習に力を注ぐということになる。同様に、クォックグーで表記する文字も声調の発音を意識して、文字に付した声調の符号を区別して表記しなければならない。だから、文字と声調符号と発音（母音や子音を含めた）に関する原則を入門期に系統立てて学ばせるという教育方法をとるのであろう。そうだとすれば、入門期の教科書で

もくじ

あそびに きてね …… 1
おはなし よんで …… 8
どうぞ よろしく …… 10
うたに あわせて あいうえお …… 12
たんけんしたよ、みつけたよ …… 16
・かきと かぎ …… 20
ともだち まど・みちお …… 22
ことばで あそぼう …… 24
はなの みち おかのぶこ …… 26
・ねこと ねっこ …… 30
あいうえおの うた なかがわ ひろたか …… 32
ことばを いれて、ぶんを つくろう …… 34
・おばさんと おばあさん …… 36
だれだか わかるかな いまもり みつひこ …… 38
はをへを つかって かこう …… 44
・おもちゃと おもちゃ …… 48
おむすび ころりん はそべ ただし …… 50
こんな ほんを みつけたよ …… 58
てがみを かこう …… 62

● みんなで よみたいな
大きな かぶ さいごう たけひこ …… 64
かんじで かこう
かずと かんじ …… 76
よく きいて、あてよう
わたしは、なんでしょう …… 80
ことばで あそぼう …… 82
じどう車くらべ …… 84
くらべて よもう
タイヤと たいこ …… 90
ひらがな かたかな …… 92
この ほんで ならう かんじ …… 94
ひらがなひょう …… 95

かんじや かたかなに ついて いる しるし。
□ あたらしい かんじ。
■ よみかたが あたらしい かんじ。
▲ あたらしい かたかな。

ある『ベトナム語１／１』においては、『こくご１上』のような多様な言語活動をとおしての言語活動の能力の獲得は、文字と声調符号と発音の力を獲得した後に、主に展開されるということになるだろう。そうしなければ、言語活動の能力を身につけ使用することができないからである。そして以上のような『ベトナム語１／１』の学習は、系統学習の立場に立つものだと言えるだろう。

一方そのような系統学習と異なる立場をとるのは、言語活動主義と称される経験主義の学習の立場である。そしてこの立場をとっているのが、日本の現在の学習指導要領であり、それに基づいて編集されているのが光村などの日本の「国語」教科書なのである。言語活動主義の学習に求められているのは、質の高い言語活動であり、それを促す「必要」と「場」の設定である。しかし、言語活動の経験から何を学ぶかは、子どもと経験のあり様とその意味化に委ねられる。そのことが一面的に強調されると、言語的事項と称される文法や語彙についての学習がおろそかになる。そのことを意識してか、光村の教科書でもひらがな、カタカナ、漢字の表記、清音や濁点などの表記と発音、一字一音の原則、数と数え方など、言語事項に関する内容を言語活動と結びつけるためにとりたてて指導しようとしている。ベトナムの教科書の場合は、そのとりたてての指導をより徹底させた形で進めているとみてよいだろう。

次に、教材の内容についてみてみよう。

『こくご１上』の中に「あそびにきてね」というユニット（単元）がある。一ページに「あそびにきてね（うさぎの顔の絵が入っている）より」、二ページに「おはよう」、四ページに「みえたよ　うさぎさんの　おうち」という言葉があるだけで、七ページの絵本になっている。この単元では、教師は子ども達に絵を見せながらいっぱい話をさせるだろう。そのことで、自然に言葉とモノやことが対応していることを子ども達は学ぶからである。この絵本のページには、ウサギ以外にゾウ、ブタ、ヤギ、サル、クマ、モグラ、ネズミといった動物が出てくる。

それぞれの動物の絵とそれらの動物の名前を対応させつつ、それらはそれぞれ姿形は違っていても「動物」であるということを学んでいく。木や花についても同様である。この他に、子ども達が知っている動物や木や花の名前を言わせ、さらにそれらについて知っていることを言わせることで、言葉の中身がよりいっそう豊かになるだろう。子ども達が生活をとおして身につけてきた言葉や意味を確認し、学級全体でそれらを共有することがこの教材で行うことが出来る。このような授業が行える教材が、『ベトナム語1／1』にあるかどうかみてみると、2～3ページのところに学校へ通う風景の絵があり、学校で学べることの喜びを話させることはできそうである。しかし、4つの雲と3羽の小鳥と5人の年齢が異なる子どもと1人の母親らしき人物が描かれているだけのシンプルな風景の絵から、言葉をたくさん引き出すことは難しいように思われる。ベトナムの教科書の場合は、光村のようなやり方ではなく、モノやことと言葉を一対一で対応させるようなやり方をとっているように思われる。それは、言葉の意味をしっかりと捉えさせようという意図からなのかもしれない。

また、「文字と韻」という副題があるところからも分かるように、言語的事項に関する指導がベトナムの場合中心になるので、教材の内容としてはそのこと以外に、どんな単語が選択されているかが問題になる。その点で言えば、第3章でも指摘しているように、ベトナム国民が敬愛するホーチミン主席のことや軍隊のこと、国旗のことを取り上げているのがまず注目される。ベトナムが、統一国家であることを子ども達に教えようとする意図がそこにはあるのだろう。

次に注目されるのは、車や船、ローラー車やオートバイ、駅や飛行機、トラクターなど工業化・近代化と結びつけることが出来る単語が示されているということである。第1節で見てきたように、ベトナム語の普及浸透と国家言語化の背景に「国語の思想」とともに、ドイモイ政策へ子ども達が成人したときに動員する意図があったということを指摘したが、このベトナムの教科書の中にそのことを確認することができる。さらに言えば、ドイモイにも貢献できるような国民の資質として勤勉や勤労があげられており、ドイモイの成功の暁にはリゾートでの生活も可能であるという夢を子ども達に抱かせるような教材も散見される。学年が上昇した場合、これらの問題がどのように現れるかは今後の課題である。ここでは、ベトナムの教科書の特徴として、入門期を意識してベトナム語の体系を系統的に指導しようとしているということと、子どもに興味や関心をもたせるために挿絵を多く使用するなどの配慮があること、そして日本の教科書と異なり国家とドイモイへの意識を高めるための工夫が単語の選択をとおしてなされていること。以上のことが確認できるだろう。

おわりに

日本とベトナムの入門期の「国語」教科書の比較をしてきた。その結果については、この章の第二節の終わりの部分で確認しているのでここでは繰り返さない。今後に残された課題としては、高学年の場合や中等学校レベルでの教科書の比較である。また、それらの教科書が入門期のものも含めて、実際にどのように教えられているか、子ども達から言えば、それを使ってどのような学習をしているか、を明らかにすることである。

なお、共同研究として、『両輪』（第39号、両輪の会編、2003年発行）に、「『ベトナムにおける言語政策とその状況』の紹介と解説」を、梶村光郎・那須泉・村上呂里の三名で執筆している。合わせて参照されたい。